

コラム 10-1 視線の検出

私たちは、他者の視線に敏感で、どこを見ているかをかなり正確に推定できますが、最も鋭敏なのは、他者が自分を見ているかどうかという「人に見られているか否か」の判断です。

数メートル以上離れてこちらを向いている人が、自分を見ているのか、自分の方向を見ても自分のすぐ後ろの別の人やものを見ている（自分を見ているのではない）のかという区別は、かなり正確にできます。このときの判断は、相手の目の白目と虹彩の位置関係から行われていますが、これは網膜上ではわずか 0.1 ミリ以下のズレで、視線角度にして 1~2° 以下の違いに過ぎません。しかし、私たちは、かなりの精度でこの区別が可能であり、こうした視線の検出には、脳に特化したモジュールが存在すると考えられています。

他者の視線を検出することは、動物にとっては、自分が弱い側の場合には、捕食者が自分を狙っているかどうかを判断する重要な手がかりになり、自分が捕食者側の場合には、獲物となる動物が自分に気づいているかどうか＝捕食できるかどうかの判断の手がかりになるので、いずれにしても生存に大きく関わるため進化の過程で発達したと考えられています。

こうした中で、人間の場合、眼の特徴として白眼（角膜）と黒眼（虹彩）の違いがはっきりしており、そのコントラストから視線方向の検出が他の動物に比べて容易にできるようになっています。これは、人間のコミュニケーションにおいて視線の役割が重要になった（微妙な視線の変化を検知できるようになった）ことと関係があると考えられています。

コラム 10-2 他者の視線と社会

知らない人と偶然に目が合ってしまった場合、日本では「目をそらす」（視線を合わせないようにする）ことが一般的であり、ある種の社会・文化的なルールとなっています。これは、動物同士で視線が合った場合には、攻撃を意味することがあるので、「特に敵意がない」ことを目をそらす（視線を合わせないようにする）ことで相手に伝えるという他の哺乳類などに見られる生物学的な行動と一致しています。

しかし欧米諸国では、知らない人と目が合った場合には、目を合わせたままで、笑顔になるか軽くうなずくなどして、敵意や悪意がないことを示します。これは文化的なルールの違いで、日本でのように、無表情で相手から目をそらすと、欧米では相手に失礼な感じを与えてしまいます。しかし、日本で知らない人と目が合ったときに、にっこり笑ったら、相手から「危ない人」だと思われる可能性が高いでしょう。

どちらも進化の過程で獲得した視線の危険性とその解消という共通の意味が背後にあるのですが、「相手に対して敵意はない」ことを示す方法が、社会によって異なる形をとってきた点は興味深いものです。このような文化や社会による共通ルールの違いは他にもたくさんありますが、異文化では思わぬ誤解にもつながることがあるので注意が必要です。

コラム 10-3 言語能力は女性優位なのか

イギリスの 2 歳児の語彙数を調べた研究によれば、女の子の語彙数は、男の子の語彙数に比べて、平均して 40% も多いことがわかっています。つまり、この時期には、すでに女性のほうが言語能力において優れていることがわかります。口げんかでは、男性は女性になかなか勝てませんが、2 歳ですでに勝負がついているとは！

しかし、この性差も、単純な生物学的な性差ではありません。男性でも、平均的な女性以上に言語能力に優れている人もいますし、女性でも口下手な人はいます（これは、Lecture3 の「胎児期」のところで説明した「心理的性差」と関係しています）。ちなみに、この言語能力の性差は、発達とともに縮まることが知られており、20 歳を過ぎる頃には平均的な差はなくなることがわかっています。つまり、言語能力が女性上位というのは、一生を通じてというわけではないのです。

なお、語彙数は、4 歳を過ぎると爆発的に増えるので、実際の数を知ることは不可能になります（皆さんも、自分の語彙数を調べてみればわかります）。ある日本人の中学生が、夏休みの自由研究で、自分の語彙数を調べようとしたそうですが、自分が知っている言葉をすべて書き出し、重複をチェックし、夏休みいっぱいかかっても、結局調べきれなかったそうです（その中学生は、その後アメリカの大学の研究者になりました）。

コラム 10-4 共感性がないとはどういうことか

共感化には、他者の心的状態を推論する「心の理論」の働きを中心とした認知的共感だけでなく、他者の心的状態に適切に反応する情動的共感が含まれています。この2つは、どのように違うのでしょうか。

たとえば、携帯を見ながら歩いている人が道路脇に止めてある自転車にぶつかるのを見て「痛いだろう」と考えるのは「認知的共感」ですが、その人の痛みを自分の痛みとして共有する（思わず顔をしかめてしまうことなど）のは「情動的共感」です。この2つは、一般的にはほぼ同時に生じますが、ときには「認知的共感」は起こっても「情動的共感」は起こらないことがあります。

テレビのニュース画面で飢餓に苦しむ人々を見たとき、その人々の苦しみは理解できても（認知的共感）、特に同情など（情動的共感）は感じないことがあります。2つの共感が起こることの重要性は、痛みの共感などの例がわかりやすく、他者の痛みを認知的に共感するだけでなく、情動的に共感することで、他者への攻撃に抑制が起こることが社会生活上重要な意味を持っていることがわかっています。

一般にサイコパスと呼ばれているようなある種の精神障害（正確には反社会性パーソナリティ障害）の一部の人には、他の人を傷つけることを楽しんでいるような行動が見られることがありますが、これは彼らに単純に共感性が欠如していることを示すとは限りません。彼らは、自分の行為が他者を苦しめることを理解すること（認知的共感）には問題がありませんが（それゆえに他者の苦痛を楽しむということが起こる）、その苦しみ自体には共感しない（情動的共感の欠如）ために、残酷な行為を平然と行えると考えられています。

このような共感処理の特異性については、近年の脳画像研究によって、脳神経レベルで共感性の処理に関わる特定の脳部位に機能不全が起こっている可能性が指摘されていることから、一種の脳神経障害と考えるべきであるとの指摘がなされています。この事実は、この種の障害には、カウンセリングや教育のような心理的なアプローチでは問題行動を変えることができない可能性を示唆しています。